Drug Addiction Rehabilitation Center

薬物・アルコール依存症は回復できる病気です

徳島ダルク
Tokushima
DARC

徳島 DARC

TEL：080-3994-4173
E-mail：kagawadarc@ybb.ne.jp

Contents

01 目次

02 薬物依存症は病気です・依存症になる薬とは？・どうすれば回復するのか？

03 薬物依存症者が自ら命を落とさないために
藍里病院　副院長　精神科医
あいざと依存症研究所　所長　吉田 精次 先生
徳島ダルク後援会　会長

05 徳島ダルクの門を叩いてください
うずしお法律事務所　所長　弁護士　瀧 誠司 先生

06 メッセージ
徳島・香川・えひめダルク 代表　村上 亨

07 入寮とは？（入寮案内）
徳島ダルクの 1 日
ダルクミーティングの紹介

09 香川ダルク　女性ハウスの紹介
香川ダルク　女性ハウス　代表　櫛田 さゆり

10 徳島ダルク入寮のご案内

11 仲間の体験談（仲間のメッセージ）

15 家族会へのご案内

16 家族の体験談

17 徳島ダルク事業案内

18 相談窓口

薬物依存症は病気です。

薬物依存症は、薬がやめたくてもやめられなくなる状態。自分の意志に反して使ってしまう病気です。WHO（世界保健機構 ）において治療により回復できる病気といわれています。

依存症になる薬とは？

シンナー・覚せい剤・大麻・MDMA などの違法薬物だけではなく、アルコール・ 睡眠薬・精神安定剤・風邪薬などの市販薬・処方薬でも薬物依存症になることがあります。

どうすれば回復するのか？

薬をやめることは回復の入り口に過ぎません。薬物依存症に陥ると肉体的・ 精神的な破壊が起こり社会で生きることが難しくなります。

ダルクでは 1 日 3 回のミーティングを中心にプログラムを実践することで少しずつ健康を取り戻し、薬を使わずにはつらつと生きること（回復）を学びます。

ダルクには同じ問題を抱え、ともに回復するために歩んでいる仲間がいます。薬物依存症からの回復には、回復しようとする仲間との出会いが必要不可欠です。

薬物依存症者が自ら命を落とさないために

藍里病院　副院長　精神科医
あいざと依存症研究所　所長　　吉田　精次
徳島ダルク後援会　会長

昭和 56 年、徳島大学医学部卒。現在、藍里病院にて副院長を務めており、薬物依存症のリハビリ施設である「徳島ダルク」の後援会会長も兼任している。
平成 13 年から、アルコール依存症治療を開始。刑務所における薬物離脱教育を 6 年間担当。平成 19 年からギャンブル依存症の治療も開始。現在は、依存症全般を専門として治療にあたっている。依存症問題に悩む家族のための強力な援助プログラムであるＣＲＡＦＴ（クラフト）を全国に広める活動を行っている。アルコール・薬物問題の予防活動として、「徳島ダルク」のメンバーと共に「アルコール・ドラッグ乱用防止教育」の出前授業を行っている。
平成 29 年より、「あいざと依存症研究所」所長に就任。

わが国における自殺の多さはここで改めて書く必要がないほど、社会的には認知されていることだと思います。しかし、薬物依存症者の自殺について、どれほどのことが知られているでしょうか。

ここに一つのデータがあります。表をごらんください。薬物依存症者が生きている間に自殺念慮を経験する率は実に８割を越えます。そして、生涯での自殺企図率はなんと５割を越えています。すさまじい現実です。なぜ、これほどまでに薬物依存症者の自殺率が高いのでしょうか。

人を自殺に駆り立てるには次の３つが重要な要因となります。それは所属感の薄さ、負担感の強さ、そして身に付いた自殺潜在能力の３つです。『所属感の薄さ』は文字通り家族や仲間など、自分のことを認めて欲しい、受け入れて欲しいと望んでいる相手や社会から疎外されるという体験と感覚です。『負担感の強さ』は「家族や友人や社会にとって自分は価値がない存在だ、重荷になっている、むしろ自分などいなくなったほうがいいのだ」という感覚です。自分の命を自ら奪うことには根源的な恐怖が伴います。それは本能的なものです。それに抗って自殺を図るためには、この強烈な恐怖に打ち勝たなければなりません。恐怖と痛みに慣れること（自傷行為などの習慣化）によって、この危険な『自殺潜在能力』を獲得してしまうのです。この３つ目の要因が最も重大なものです。

薬物に依存することは、単に快楽を求めての結果だという見方はあまりにも表面的すぎます。すでに多くの研究からは、快感を得るというプラスの効果以上に、特に慢性的な薬物使用になればなるほど、嫌な、ネガティブな感情から逃れるという効果のために使用するようになることが明らかになっています。

そして、なにかがあったときには薬物使用が唯一の対処法になっていきます。かつてアルコール依存症のことを「慢性自殺」だと語られたことがありましたが、実は自殺するために使用しているのではなく、今をなんとか生きるために使用している（使用せざるを得ない）という側面が非常に強いのだと思います。ある意味、刹那を生きるこのスキルによって、危険な能力が自分の内に徐々に形作られていくと言えるのかも知れません。

薬物依存症に陥った人が医療に救いを求めてきた時に、他の精神疾患同様に治療と援助を提供しようとする医療機関がどれほどあるか、ご存知でしょうか。極めて限られた数しかわが国には存在しません。公然と「当院では薬物依存症は診ていません」と言われた当事者や家族の証言は無数にあります。薬物使用は孤独な行為です。救いを求め、断られる体験はさらに孤立を深めさせるにちがいありません。所属感の弱さと負担感の強さは依存症そのものの属性というよりは、どのような扱いを受けてきたかという２次被害によるものが大きいのではないかと思います。

依存症からの回復に必要なものは「信じる力」です。自分を信じる力、相手を信じる力、回復を信じる力です。それは人と人のつながりの中で生まれるものです。まずは、誰かから理解されようとする、信じようとされるという経験から生まれてくるのではないかと思います。大切なことは、薬物依存症をできる限り深く理解しようと努力することを怠らず、相手を理解しようとすることを続けていくことだと思います。そして、私たち医療者は回復に必要な援助を可能な限り提供できるよう、さまざまな力を獲得することが必要だと思います。

依存症と自殺

	自殺念慮		自殺企図	
対象者	１年以内経験率	生涯経験率	１年以内経験率	生涯経験率
全国民からランダム抽出	4.0%	19.1%	-	-
健常対照群	2.7%	14.5%	0%	1.8%
病的ギャンブリング群	26.7%	62.1%	12.1%	40.5%
アルコール使用障害者	-	55.1%	-	30.6%
薬物使用障害者	-	83.3%	-	55.7%
大うつ病性エピソード該当者	19.4%	-	8.3%	-

【出典】第 2 回依存症者に対する医療及び回復支援に関する検討会発言病的賭博(ギャンブル依存症について)田辺等(北海道立精神保健福祉センター)

うずしお法律事務所 所長 弁護士　瀧 誠司

東京大学法学部卒。
平成 14 年 10 月に司法試験に合格。
平成 16 年 10 月に徳島弁護士会に登録し、あわ共同法律事務所で執務。
平成 23 年 12 月 19 日に独立して、うずしお法律事務所を創立。
平成 25 年度・平成 28 年度 徳島弁護士会副会長。
徳島大学非常勤講師。
徳島南ロータリークラブ・徳島絆ネット・NPO 法人アプローチ会など、
高齢者障害者の権利擁護活動や自殺防止活動・子どもの人権活動に造詣が深い。
新たに徳島ダルクの活動を後輩弁護士とともに支援している。

覚せい剤や大麻や危険ドラッグを使用することは犯罪とされています。またアルコール依存症については、その点については犯罪にはなりませんが、犯罪の原因として問題になっています。この点について「犯罪」として処罰するということでは全く問題は解決しません。

今の法律では「処罰」とは刑務所に入れるということなのですが、多くの人達は刑務所から出てきてもまた薬物を使い続ける生活やアルコールに依存する生活に戻ってしまいます。それは、その人達が反省していないから、更生していないからということなのでしょうか？

それは違います。薬物を止められないのは薬物依存症という病気になっているからです。アルコール依存症も病気です。刑務所では残念ながらそのような病気を治すことはできません。病気を治すためには、適切な支援と治療が必要です。

徳島県にダルクができました。徳島ダルクには、薬物依存症やアルコール依存症などからの回復を目指して、薬物やアルコールを使わずに暮らしている仲間達がいます。必要な場面では、医療機関や弁護士などの連携もとっています。

ここでは、仲間達とミーティングを繰り返しながら互いに支えあうことで、薬物やアルコールの使用が止まっているのです。あなたも、本人として、家族として、薬物やアルコールを止められないことで絶望しているかも知れません。しかしこの場所には希望があります。仲間がいます。

是非、徳島ダルクの門を叩いてください。

徳島・香川・えひめダルク　代表　村上 亨

13 歳で初めて薬物と出会った。以降、薬物依存症に陥る。
30 歳頃より、3 度の刑務所を経験する。
3 度目の刑務所出所後、北九州ダルクに繋がり、薬物依存症からの回復が始まった。
平成 23 年 12 月、香川ダルク設立。
平成 25 年 12 月、徳島ダルク設立。
平成 29 年 3 月、えひめダルク設立。
現在、徳島県、香川県、愛媛県を中心に学校講演等、精力的に活動している。
仲間と共に生きながら、回復のメッセージを送り続けている。

僕は１３歳の時に、初めて薬と出会いました。できる事とできない事を見分ける力がないままに、薬を使い続けました。

精神病院に入退院を繰り返すようになりました。そして、４度の逮捕で計３回、約１０年間を刑務所の中で過ごしました。その間、社会に出たのはわずか半年ほどでした。身も心もスピリチュアルな面もボロボロになっていました。

３回目の服役の時、父親が面会に来て、「一人で生きていくのか、それともダルクに行くのか」とだけ僕に伝え、父親は立ち上がり面会室を出ていきました。

出所の日、僕は紙袋を２つぶら下げ、着の身着のまま北九州のダルクに繋りました。３９歳でした。どうしようもなかった重度の薬物依存症の僕を、ダルクは受け入れてくれました。

リーダと仲間たちとの出会い、ダルクのプログラム、ミーティングとの出会いがありました。そこから、今日まで１０年以上、薬の使用が止まっています。

平成２２年９月、当時ダルクが無かった香川県に、ダルクを設立しようと尽力していた、先行く仲間である、伊藤弘行氏が亡くなりました。僕は気が付いたら仲間達の前で手を挙げ、「僕がやります」と言っていました。

伊藤氏の遺志を引き継ぎ、右も左も分からないまま、一度も足を踏み入れた事のない香川県に来ました。そして、平成２３年１２月に香川ダルク、平成２５年に徳島ダルクを設立し、平成２９年３月、えひめダルクを仲間と共に設立しました。今日まで仲間と共に新しい出会いを繰り返しながら、共に活動を続けています。

薬物依存症という病気は、「治癒」は無いが、「回復」は、し続けることが可能です。ダルクの目的は、依存症という病気で苦しんでいる仲間が、再び社会の有用な一員として、共に生きていく為の手助けをすることだけです。

徳島ダルクは、「ありのままを認め合いながら、共に生きる居場所を、地域に根ざすこと」を理念に、これからも活動を続けていきます。

入寮とは？

入寮・通所によるリハビリプログラムの提供

薬物依存症者に共同生活の場と、薬物を使わない新しい生き方を実践するプログラムを提供することによって、薬物依存からの回復を支援しています。

薬物依存症の他、アルコール依存症、クレプト（窃盗・万引き依存症）、ギャンブル依存症、その他の依存症の受け入れも可能です。まずは、ご相談ください。

徳島ダルクの一日

7:30 ～ 8:00	起床
8:00 ～ 8:30	朝食
9:30 ～ 10:00	施設内清掃
10:00 ～ 11:00	ダルクミーティング
11:00 ～ 13:00	買い物、昼食、休憩
13:30 ～ 16:00	運動プログラム（ウォーキング） ＊雨天時はダルクミーティング
16:00 ～ 17:00	休憩・筋トレ
17:00 ～ 17:30	夕食の買い物、夕食の下準備
19:00 ～ 20:00	自助グループのミーティング
20:30 ～ 21:30	夕食の準備、夕食
21:30 ～ 22:30	入浴
23:00 ～ 24:00	就寝

●レクリエーション、その他

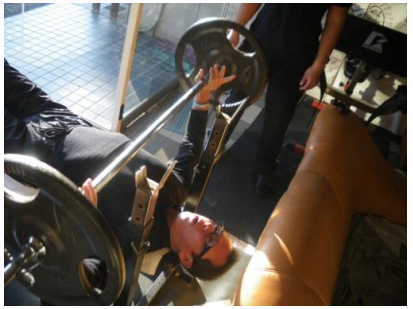
夏は海遊びやサーフィンなど、季節に合わせたプログラムも実施しています。

また、自助グループの大会や、県外のダルクフォーラムなど、国内や海外での研修にも参加しています。

～ サーフィンスクールの様子 ～

●ビーチクリーン活動

●食事の風景



●運動プログラム・筋トレ

薬物依存症に陥ると肉体的な破壊が起こります。
散歩をしたり、走ったり、ベンチプレスなど、ともに運動することで健康を取り戻していきます。

ダルク ミーティングの紹介

ダルクミーティングとは、全国 90 箇所のダルクが共通して取り入れている依存症リハビリプログラムです。

自助グループの回復プログラムに基づいた「ダルク ミーティング」は依存症から回復する為の大きな柱となっています。

ミーティング風景

ダルクのミーティングでは、同じ依存症者の仲間同士でこれまでの体験を深く分かち合い、「過去、どうであったか」「現在、どうであるか」「これからどうなりたいか?」について、正直に事実と行動をありのまま話します。

ダルクのミーティングを通して、自分自身と向き合い、そして同じ悩みを持つ仲間と信頼関係をつくる事で、お互いに支え合いながら新しい生き方を見出していきます。

香川ダルク　女性ハウスの紹介

香川ダルク　女性ハウス　代表
櫛田　さゆり

私自身、処方薬に依存し、やめたくてもやめられず、摂食障害にもなり、食べ吐きを繰り返してきました。私の息子も薬物に依存し、親子で狂っていました。その結果、家庭は崩壊。家を失い、自分の居場所をなくしました。

たどり着いたのは薬物依存症の回復リハビリ施設「香川ダルク」でした。仲間と２４時間うんざりしながら過ごし、ミーティングで人の話を聞いて、自分の話をする面倒くさい事をしました。自助グループのミーティングやダルクのプログラムを続ける事で、どうしても止められなかった薬、摂食障害が不思議と止まっています。

香川県に、女性専用の依存症リハビリ施設「香川ダルク女性ハウス」が設立され、女性の方も入寮の受け入れが可能となりました。

私は、同じ悩みを抱える女性や、刑務所や専門病院等で、今も薬物依存症という病気に苦しんでいる、居場所や行き場の無い女性の仲間と回復のプログラムを一緒にしたいです。

香川ダルク女性ハウスへのお問合せ・入寮のご相談

TEL/080-3994-4173

（徳島ダルク代表 村上）までご連絡ください。

徳島ダルク入寮のご案内

入寮・通所費

入寮費　１ヶ月・・・・・・・・・・・・・￥155,000
（初月のみ￥170,000）

入寮費内訳	
生活費	１日￥2,000×１ヶ月
家賃負担分	￥41,000
共益費負担分	￥20,000
プログラムケア費	￥32,000

通所費　１日・・・・・・・・・・・・・￥5,000

通所費内訳	
プログラムケア費	￥3,000
食費等	￥2,000

生活保護費の範囲で入寮・通所もできます。費用のことなど、どんなことでもよいので一人で考えないで一度ダルクに相談ください。
相談は無料です。電話相談は、２４時間対応しています。
体験入寮・通所も行っていますので、ダルクへ相談ください。

入寮・通所についてのお問合せ

TEL/080-3994-4173
（徳島ダルク代表 村上）
E-mail/kagawadarc@ybb.ne.jp

仲間の体験談

～ Voice ① カンナムの話 ～

危険ドラッグと出会いました。アダルトショップでコンドームの袋のような物がグッズの棚にありました。買ってみることにしました。白い粉が入っていました。舐めてみました。酒に酔った感覚になりました。フワフワして嫌なことも忘れて気持ち良かったです。

また買いました。酒と同じくらいに考えてました。部屋の窓から落ちました。フェンスとブロックの間で宙ずりでした。救急車やパトカーがきて、レスキュー隊に助けてもらいました。病院の先生に、「次の日曜日に婚約者とウエディングドレスを見に行くんです退院させて」と言いました。

病院を出て薬を使いました。試写室で粉を飲んで気が付いたら両親の経営する会社に車で突っ込んでました。車を乗り換えて自宅に行きました。警察官を引きずりながら自宅に何度も車で突っ込みました。

一人ぼっちになりました。やけくそでした。運転中に薬を使いました。事故をしました。近くにあったガソリンスタンドを壊しました。走ってきた車も壊しました。飲食店のガラスをタンクで割って中に入って暴れました。また逮捕されました。

施設に繋がりました。現在、三年四カ月、薬の使用が止まっています。もうすぐバイトプログラムのうどん屋に行って一年がたちます。今まで練習してきた聞く事、話す事、続ける事をしています。皿洗いを続け最近少し麺を打てるようになりました。そして、仲間の元に沢山の麺を持って帰れるようになりました。

これからも続けていきます。仲間と共に生きます。トルコにまだ苦しんでいるであろう仲間の居場所を仲間と共に作ります。

～ Voice ② シンゴの話 ～

薬の使用と密売で警察に捕まり刑務所に行きました。人の言う事など聞く耳を持たず我がまま好き放題に生きてきた僕が、「右向け右」と言われたら右を向き、歩く時は号令のもと行進をする、何をするにも許可をもらってからでないとすることができないという監視の中での不自由な生活を強いられることになりました。

受刑生活では、自分が優位に立って生活をするかということを考えてばかりいました。だから刑務官の前では真面目なふりをする、受刑者同士では自分がどれだけ悪かったか、どれだけの薬を扱ってきたかの話、家族には、自分が家族みんなを心配している心優しい家族思いの息子を演じながら、面会や金銭と本の差し入れを要求することをしてきました。

そんな中、偽りの自分を作る癖がついてしまいました。刑務所なんて二度と来たくないと思った僕は薬をやめようと考えるのではなく、次はどうすれば警察に捕まらないか、薬を安く手に入れ高く売るネットワーク作り、出所したら薬をキメてどうやって楽しむかということしか考えず受刑者同士で薬仲間を増やしていきました。

出所後すぐに薬を使用して、また同じように薬の密売をするようになり刑務所には二回で七年八カ月入所しました。刑務所では薬物依存症だと気付くことすらできませんでした。

現在は施設でプログラムを受け二年三カ月薬が止まっています。依存症の仲間の手助けをしながらメッセージを伝えている先行く仲間を見て僕もそうなりたいという希望を持って毎日プログラムを受けています。続けます。

～ Voice ③ ユウヘイの話 ～

自分がクレプトマニアだと知ったのは施設につながってからでした。初めて万引きしたのは高校を辞めて、酒やタバコを覚えはじめた１５才の頃でした。ＣＤをカバンに入れて店を出たのを覚えています。

恵まれた環境にいながら不平不満ばかり言っていました。この頃はとにかくバレない様にバレない様にと思いながらやっていました。周りの友達に対して友達である証が窃盗と薬物をする事だと思っていました。

何とかだましだまし社会で生きていました。３０才の時、結婚をしても万引きはとまりませんでした。

この頃から睡眠薬もたくさん飲むようになっていました。コンビニやスーパー、ホームセンターなどで使いもしない物まで盗んで車の中にたくさん置いていました。万引きをするのは当たり前の事という認識の中で生活をしていました。

３４才の時にドラッグストアで咳どめを取り逮捕され、その１年半後また空港の書店で本を取り逮捕されました。

その時、施設の事を知り裁判の心証をよくしたいという理由から施設に入りました。回復に向けてやっていこうという気持ちは全くありませんでした。

自分がクレプトマニアという病気だと認められませんでした。
今はつながって１年がすぎ、刑務所ではなく社会で居る事ができています。自分のイヤな事したくない事をする練習をしています。自分の弱さや恥ずかしい事を話して、仲間の話を聞き、体を動かして食べる事で元気になれました。万引きも薬も止まっています。
これからも居続け、仲間の居場所を作り、まだ苦しんでいる仲間に、自分がしてもらった事をしていきます。共に生き続け回復していきます。

～ Voice ④ ショウタの話 ～

毎日の様に近所のスーパー３軒を順番に回っては酒を万引きし、家で飲んでいた。持っていくものは肩掛けのトートバックのみで身なりには気を使っていた。最初のうちはビールのダースやチューハイなどだったが、量も度数も物足りなくなり、それがウィスキーや、ワインに変わっていった。２４時間、何日間も何週間も酒を身体から途切れさせないよう常に部屋には酒のストックと空きビンが転がっていて、それを片づける事さえしようとしなかった。部屋のこもった空気が嫌で、季節を問わず窓を全開にしてエアコンをかけていた。
空を見るのが好きで、ベランダにはスタンドと灰皿とパイプイスを２つ並べて、よくそこでボンヤリと空を見ながら酒を飲んでいた。
ケータイが鳴る音さえ煩わしくて、電源を入れるのは１日のうち３、４回程だった。家族、友人とも連絡を取らず、会話もほとんどしていなかった。
昼夜の感覚がなくなっていた。仕事にも時間にも縛られず、僕は完全な自由を求め、それを掴んだと思っていた。すべて酒を飲んだ事による錯覚だった。
急に押し寄せてくる不安、体調の悪化もアルコールを飲んで誤魔化し、麻酔の代わりのように飲み続けた。自分がアル中である事は明白だったし、医師から「あなたはアルコール依存症です」と診断された時も、一切の否定、否認は無く、「あぁ、やっぱりそうか」とすんなり受け入れる事が出来た。そこから飲酒のペースがさらに加速していった。
もう何もかも、どうでも良かった。酒を飲んで死ねるなら本望だ。と本気で思っていた。体を切って自分の血でキャンバスに絵を描く、狂気の日々だった。
現在、施設につながり、今までの人生で最も避けてきた体を鍛える事と、酒を断った生活を仲間と共に続けている。
今は、仕事をしたいという気持ちを抑え、バイトプログラムに出ている仲間、探している仲間の動きを見てバイタリティに変えている。

～ Voice ⑤ リョウタの話 ～

僕は、２３才ぐらいの頃に、スロットと出会い、何回かパチンコ屋に行くうちにスロットにはまり、家族のサイフからお金を取ったり家にある売れるような物を売って、現金に変えてパチンコ屋に行っていました。
自分のサイフのお金がなくなると家族の物に手を出してパチンコ屋に行っていました。
パチンコ屋では、店が開く前朝早くから入口の前に並んで、開店と同時に店の中に入ってスロットを打っていました。
パチンコ屋の中では、缶コーヒーとタバコがあればよくて、ご飯は食べていませんでした。開店時間から閉店時間、約１３時間ぐらいひたすら打ち続けていました。
お金を増やす目的でパチンコ屋に行ったり、何か嫌な事があるとパチンコ屋に行ってストレスはっさんしていました。
それでも、負けるとよけいストレスが溜まって、結局イライラして家に帰っていました。そんな時は、コンビニで好きな物を買えるだけ買って、自分の部屋に持って行って、一度に全部食べていました。
お金を持っていなくても、パチンコ屋に行って、誰かが打っているのを見ているだけでも気分が落ち着く時もありました。
どんなに負けが続いていても、次に取り戻せればいいと思っていました。情報集めをするのも好きでした。そんな僕でした。
施設につながって三カ月が経ちました。今は、パチンコ屋に行かずに、仲間と一緒に、施設のプログラムをやりながら、生活をしています。
今は、自分のできる事を少しずつでもやりながら、施設の生活の中で、何か目的を見つけていきたいと思います。

家族会へのご案内

依存症の問題にお悩みの家族の方へ…

家族会 メリーゲート

メリーゲートの特徴

薬物依存症 リハビリ施設 徳島ダルクとの繋がり

メリーゲートは、発足時より徳島県唯一の薬物依存症リハビリ施設「徳島ダルク」と、回復の歩みを共にしてきました。徳島ダルクによる、家族相談はもちろんの事、依存症などの病気を抱えている当事者を徳島ダルクに繋げる事も可能です。

依存症専門医師 藍里病院 副院長 吉田 精次医師による依存症家族勉強会への参加

毎月、第 4 土曜日に藍里病院で、吉田精次医師による、依存症家族勉強会に参加しています。(クラフトプログラムの学習も行っています)

- 会場／社会医療法人 あいざと会 藍里病院 新館 3F 会議室 (AM10:00～AM11:30)
- 住所／徳島県板野郡上板町佐藤塚字東 288-3

ミーティング案内

グループ	開催日・時間	会場・住所
徳島	毎月第 4 土曜日 13:00～14:00	藍里病院 徳島県板野郡上板町佐藤塚字東 288-3
香川	毎週土曜日 13:00～15:00	かがわ総合リハビリテーションセンター 香川県高松市田村町 1114 番地
丸亀	毎月第 1 日曜日 13:15～15:15	カトリック丸亀教会 香川県丸亀市幸町 2-6-28
松山	毎月第 2 土曜日 13:00～15:00	カトリック松山教会 愛媛県松山市三番町 4 丁目 5-5

会場予約等、諸事情により日程変更となる場合があります。
開催日時の確認等、下記のお問合せ先へ事前に御連絡ください。

家族会 メリーゲート お問合せ

TEL:090-9450-7173

E-mail:admire12step@yahoo.co.jp

＊秘密は厳守いたします。安心してご相談・お問合せ下さい。

家族の体験談

息子は今３２歳。処方薬を大量に服用して、おかしくなった。飲んでは暴れた。家の中は、めちゃくちゃ。何回か警察にも助けを求めたが、解決しなかった。私達夫婦は彼に頼まれるまま病院を掛け持ちして、大量の処方薬を渡していた。金銭もできるだけ応援した。“してはいけないこと”のほとんどをやった。薬を飲んでは暴れ、自殺未遂を繰り返す息子。そしてどうにもならなくなった。

そんな頃、亨さん※と出会った。“病気なのはあなただよ”と言われた。納得できなかった。だって私は自分が一番の被害者だと思い込んでいたんだもの。その後も亨さんの提案にはほとんど従わなかった。提案されても「だって、でも、そんなこと言ったって…」私の耳は聞くことを拒み頭の中は自分の考えしかなかった。その凝り固まった考えで自分の答えを出す。今までさんざん失敗してきたのに、まだ懲りずにやり続けた。“あの子を立ち直らせることが出来るのは私達の愛情だけ”まさしく病気だった。困った時だけ昼夜を問わず亨さんに電話する。なのに提案は受け入れない。変われない私。

そんな中、事件は起きた。大量に薬を飲んだ息子が灯油をまき家に火を放った。全焼だった。すべてを失って、はじめて目がさめた。家族会に通った。亨さんの提案を少しずつ受け入れた。少しずつ回復が始まった。各地で行われるフォーラム、ナラノンに参加するたび仲間の大切さを実感した。現在息子には会っていない。彼を回復させられるのは私ではない。息子を仲間の所へ送り出してやる事が本当の親の愛だとやっと気づけた。

最近またスリップしてしまった。家族会で吐いた。仲間に聞いてもらい笑われ少し楽になった。まだまだ病気全開の私だが、仲間と共に回復していきたい。私は私。自身の回復の為、仲間の回復の為、自分にできるサービスを精一杯やっていきたい。それが彼の回復の一番の近道だと今やっと信じられるようになったから。これからもかつての私のように出口のないトンネルの中で苦しんでいる家族が、ひとりでも多く家族会に繋がれるよう私は私のできる事を仲間と共にやり続けたい。

※徳島・香川・えひめダルク 代表　村上 亨

徳島ダルク事業案内

法務省委託事業　自立準備ホーム（平成 26 年 6 月登録）

薬物犯罪等の刑務所出所者（仮釈放の者を含む）や保護観察中の方に、薬物依存症の治療及び回復のプログラムと、入寮（共同生活）による生活訓練を提供することで、再犯防止を図るだけではなく、社会の有用な一員として自立した生き方が出来るようサポートを行います。

面会メッセージ・裁判における情状証人出廷

刑務所・拘置所、専門病院などへの面会メッセージ活動を行っています。また、薬物事犯などの裁判における情状証人出廷を、医師・弁護士と連携して行っています。

薬物乱用防止啓発活動

薬物乱用防止・啓発活動の一環として、医師や弁護士と連携して、学校及び教育機関、行政機関、保護観察所、刑務所、病院等で講演活動を行っています。

毎年 2～3 月に、徳島ダルクのフォーラムを開催しています。医師や弁護士を中心とした講師講演やダルクの仲間による体験談発表が主な内容です。ぜひ、私たちのメッセージを聴きに来ませんか?

＊平成 26 年 9 月に「危険ドラッグ対応研修」を徳島県（後援：徳島県）、香川県（後援：香川県精神保健福祉センター）で実施。延べ 300 名が参加。

相談支援事業と家族会

依存症に悩んでいる当事者、家族、関係者の方からの相談を 24 時間、受け付けています。相談内容に応じて医療機関や弁護士等と連携し、問題の解決に向けた支援を提供しています。

依存症の問題にお悩みの家族の方には、家族会（自助グループ）や、藍里病院で行っている依存症家族教室「クラフトプログラム」をご紹介しますので、ご相談ください。

相談窓口

一人で悩まず、共に解決の糸口を探しましょう!

DARC（ダルク）とは、「薬物依存」「アルコール依存」「ギャンブル依存」「クレプトマニア（窃盗症）」「摂食障害」などの、「依存症」から回復する為の専門施設です。（入寮・通所でのリハビリプログラムを提供しています）

子どもやパートナー、家族が依存症かもと感じているあなた、今すぐご連絡ください。専門スタッフが対応しますので、一人で悩まずに下記の連絡先へお電話、またはメールにてお問合せ下さい。（ご相談の内容や個人情報等、秘密は厳守いたしますのでご安心ください）

徳島 DARC 相談窓口

TEL：080−3994−4173

E-mail：kagawadarc@ybb.ne.jp

徳島ダルク 住所
〒770-0861　徳島県徳島市住吉 4 丁目 3-64
ラヴィータ博愛パートⅢ 202 号室